

失われた時を求めて

続大

つめた時を求めて
遠藤 誉

大

著者紹介 えんどう ほまれ

昭和16年1月3日、旧満州新京(現、長春市)生まれ。昭和50年東京都立大学理学研究科物理学専攻博士課程中退。物理学者(一橋大学物理研究室)。理学博士。2児の母。「不条理のかなた」で昭和58年第4回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞の優秀賞受賞。著書は「卡子」(59年読売新聞社刊)、「けれど、わが『満州』」(59年文藝春秋刊)。

著者
続カード

失われた時を求めて

定価九八〇円

著者——遠藤 誉

編集人——谷亀利一

発行人——堀内 稔

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一
〒一〇〇
大阪市北区野崎町八の一〇
〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一
〒八〇二

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——大口製本印刷株式会社

第一刷——昭和六十年九月十三日

ISBN 4—643—74140—6 C0095

©1985, Homare Endo

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

続卡子 目次

序章 5

第一章 自由の大地 23

第二章 解放区延吉 55

第三章 再びの命 87

第四章 何処へ——朝鮮戦争勃発 145

第五章 失われた時を求めて 179

あとがき 233

装丁・地凶
写真提供
遠藤 誉
重原保男

続

カード
チャーズ

失われた時を求めて

序

章

へ一九四五年八月、日本の敗戦と前後して、中国の東北《満州》で起こった事態の推移は、日本人にとってはぬぐい去ることのできない悲惨な記憶でうずめられている。だが、この時期の東北が、新中国を生み出した『第三次国内革命戦争』の大勢を決する戦場となった経緯はあまり知られていない

（長野広生著『東北の内戦』から）

その経緯の中の一つに、長春という戦場がある。長春の戦場の陰で何が起こったか、それを知る人はさらに少ないだろう。一九四六年から四七年（昭和二十一年から二十二年）にかけて百万人遣送といわれた日本人の大量引き揚げが終わると、国民党軍のたてこもる長春は鉄条網で包囲され、糧道を断たれて餓えていった。そしてその包囲網の中にまだ子供だった私もいた。

人が人をどこまで追いつめてゆくことができるのか、追いつめられた人間はどのようなことま

で成し得るのか。むぎむぎと人命が失われていったその事實は、四十年近い歲月の中で、今ひそやかに風化されようとしている。大勢を決する歴史の陰には、その中で生き、その中で死んでいった一つ一つの命があり、叫びがある。その命も声も歴史の暗部に吸い込まれて、ここに消えようとしている。

光の当たらなかった暗部で、人間の真実がうごめいている。歴史の陰りの中から、餓死者の瞳が哀しく、じっと、こちらを向いている。私にはその命が見える。声が聞こえる。

生き延びたおまえは、いったいいつまで黙っているつもりなのか――。

旧満州国の国都であった長春（旧新京）で終戦を迎えた時、私はまだ四歳と八か月の女の子だった。その日、家の前の興安大路（きやうあんたいちう）を軍用トラックが何台も何台も通っていき、ゲートル姿の若い兵隊さんが「こんなことだから戦争に負けるんだ」「みんな持っていけ！」と叫びながら、トラックの上から砂糖や小麦粉、米、カンパン、軍服の服地、毛糸などをぼんぼん道路に投げつけていった。市民は物資不足で苦しんでいるのに、軍はこんなにたくさんものを蓄えていた「こんなことだから戦争にも負けるんだ」兵隊さんはそう言いたかったのだろう。物資に殺到する市民の群から身をよけながら、私は足元に転がってきた小さな赤い巻き糸を一つ、そっと拾い上げた。それから三年ほど経った同じ興安大路で私が見たものは――。

一九四七年（昭和二十二年）晩秋、突然、長春の街から電気が消え、ガスが止まり、水道が止まった。その冬には共産党側の八路軍の包囲がさらに狭まり、長春の食糧封鎖が完璧となった。包

囲網の中には長春を支配する国民党政府がある。政府にとって必要最少限の技術者を残し、そのほかの日本人はすべて引き揚げさせた直後の出来事であった。

国民党軍には豊かなアメリカが付いている。包囲した八路軍はすぐ戦いを交えようとはしない。市民ごと困って餓えさせ、国民党軍の士気の低下と疲弊を待った。しかし、国民党軍よりも先にやられたのは、巻き添えでしかない市民の方である。国民党軍は空からの物資援助を得ている。

国民党政府に留用された日本人技術者の一人として、父もその包囲網の中にいた。ギフトールという麻薬中毒者の治療薬を発明し、中毒患者の治療に当たるため一九三七年（昭和十二年）に渡満して、興安大路に設けた新京製薬で薬をつくっていたのだった。長春が封鎖された時、工場には女子供を含めて二十三人しか残っていなかった。私の家族構成は両親と腹違いの兄が一人、十一歳と九歳の二人の姉、四歳の妹、そして二歳の弟である。二十八歳の兄には妻と二歳になる息子、高たかし司ちゃんがいだが、兄嫁は終戦の翌年、コレラですでに亡くなっていた。

最初のうちは動力源が無くてもつくることのできる薬を工夫したり、物々交換などをして、父は二十三人を養っていたが、それもすぐに限界がきた。長春市の食糧源そのものが底をつき始めたのと、工場の倉庫に残っていた交換物資がたちまち無くなってしまったからだ。

二十三人の中には、工場長をやっていた父の甥とその家族、七人がいる。甥は白ネズミという綽名あだなで呼ばれている。ネズミとはこ泥のこと、あの辺りに多いどぶネズミに比べて人間の顔の色は白いから白ネズミというのである。白ネズミは終戦の前から、いつも工場のものをこっそ

り売り飛ばしては、そのお金を懐に入れていた。工場の人たちは彼のこと泥行爲を見て彼に白ネズミという綽名をつけた。長春が食糧封鎖されると、白ネズミは彼の手腕をさらに發揮して、工場の倉庫に残っていた製菓材料をすべて彼と自分の家族の血と肉に変えてしまったのである。

嚴寒期に入ると長春は零下三十度前後まで下がる。暖房なしで過ごすことはできない。街のあちらでもこちらでも餓死者が出たという噂が入ってくるようになった。

新京製菓の最初の犠牲者は高司ちゃんだった。火鉢の中に頭を突っ込んで髪の毛を焼き、奇妙な行動を繰り返したあと、動かなくなった。

私たちも骨と皮に瘦せてしまった。目が窪んで鼻とあごがツンと尖り、皮膚はたるんで皺だらけになった。あばら骨が浮き出る胸の下で、おなかだけが異様に大きい。髪の毛が抜け、ビタミンの欠乏からくる潰瘍（かいよう）ができ、体のあちこちの肉がつぶれたように崩れる。心臓はまだ動いているのに、体の方が先に死に、腐乱していくようであった。体が弱ると虫もつきやすくなる。シラミや南京虫が黒くしおれた皮膚の皺にもぐり込み、列をなして繁殖した。

私は結核性の筋炎と骨髄炎を患っていた。終戦の翌年の四月にあった市街戦で、八路軍側の弾を右肘に受けたからだ。大好きだった夕陽を見ようとした瞬間のことだった。その傷跡に結核菌が付いたらしい。結核菌はこの頃には両腕と足先にまで飛んでいた。

体力の消耗を最少限に留めるため、私たち子供は一日中ゴロゴロと横たわり、ワニのようにただじっと待った。いつ訪れるかわからない、封鎖が解除される日を、あてもなく、じっと待ち続けた。しかし翌一九四八年（昭和二十三年）の春が訪れても包囲は解かれない。

それでも飢餓都市、長春にも太陽だけは平等に降り注ぐ。八路軍がどんなに固く鉄条網を張りめぐらそうとも、天地の恵みまでも遮ることはできない。

五月に入ると草花が一斉に芽吹く。市民はわれもわれもと外に這い出て雑草を摘み、春榆はるにれの若葉を摘んで命の糧とした。だから雑草も榆の葉も芽吹くごとに摘まれて、たちまち無くなってしまった。

長春は近郊から農産物を得ている消費都市である。市内には畑はほとんどない。空き地を開墾して作ったわずかな畑地には国民党軍が見張りに立ち、市民が近づくと銃殺する。

ときたま手に入っていた大豆の搾りかすである豆餅どうピンという豚の餌も、高粱酒こうりやんしゅの搾りかすをレンガのように固めたものも、めったに手に入らなくなった。

餓死者が続出した。

七月に入ると、兄が死んだ。何だかおなかの様子がおかしいと言って横になったきり、餓死してしまった。

続いて父が倒れた。息はしていたが、しゃれこうべのようになり起き上がれなくなった。

「いよいよ社長の番ですね」

母にそつとささやいたM氏が、おなかが痠だと言って横になった。工場に残っていた技術者の一人で、娘さんと二人の息子さんがいる。

「どうも主人の様子がおかしいんですけど」

奥さんが母を呼びに来た間にM氏はこと切れた。

M氏の五歳になる息子さんもあとを追った。

二階の窓から見下ろす興安大路は死の街と化していた。夏になると豊かに茂っていた街路樹の葉は食べ尽くされて一枚もなく、死んだような街路樹の根元には餓死者がそのまま放置されている。その周りを犬がうろつく。餓えた長春で犬だけがころころと肥えている。私の家にもボチという犬がいた。もう何か月も食べていないはずなのに、やはり太っている。

ある日、ボチが長く使われていない応接間から、口の周りを真っ赤にして舌なめずりをしながら出てくるのを母が見つけた。おそるおそる応接間の中をのぞくと、そこにはボチに食べられた赤ん坊の頭が二、三個転がっていた。

ボチの命は私たちの命の糧として消えた。

城内には人肉市場が立ち、人肉の切り売りをしているという話がひそひそとさやかれるようになった。城内とは昔の長春市の城壁の跡で囲まれた部分を指し、地元の中国人ばかりが住んでいる所である。中国人街とも言ふ。

八路軍の入城が近いという噂も入ってくる。その噂を頼りに父は最後の物を手放した。私たち子供では持ち上げるのが大変なほど重いウォルサムの金の置時計である。物々交換の役目はいつも白ネズミが率先して引き受ける。上前をはねて自分の懐に入れるためだが、しまいには父の方から白ネズミに頼むしなくなっていた。白ネズミとその家族のほかは、みんなもう、その日のうちにも餓死しそうなほど瘦せている。足元もおぼつかない。しかし食糧は城内にでも行かなければ手に入らないし、その城内は危ない所でもある。だからこんな時でも肉が付き、足どりも軽

やかな白ネズミに頼むしかないのだ。

しかし白ネズミはその日、手ぶらで戻って来た。金時計はそっくりそのまま盗まれてしまったと言う。もちろん誰一人そんな事を信じる者はいない。最後の頼みの綱を失い、父は遂に長春脱出を決意した。

ステッキにすがって立ち上がり、父は留用を解いてくれるよう、長春市長に頼みに行った。市長はあまりに変わり果てた父の姿に驚き、こんなになるまで放置したことを詫びて父に多額の餞別をくれた。父はそのお金で荷車を一台買い、残りをそれぞれの家族に平等に分配した。

実はこの年の五月に、母は男の子を一人産んでいた。マーちゃんという愛称で呼ばれたこの弟は、鼻すじが通り、唇のひきしまった、端正な顔立ちの子である。栄養失調で母乳が出ず、高粱の重湯だけで育てられたので、生きているのが不思議なほど瘦せていたが、長春を脱出する前の夜、マーちゃんは静かに短い命を閉じた。

一九四八年（昭和二十三年）九月十九日のことであつた。

長春市は四周を鉄条網の柵で囲まれているが、その南西の一角には関所のような出口が一所設けられている。そこはカ子チャリスと呼ばれていた。カ子とは「人が番をして狭い口をふさぐ」という意味である。長春市民の脱出ルートは厳重に決められていて、このカ子を通らなければならない。他の鉄条網を無断で越えて脱出すると、スパイとみなされて、国民党軍からも外側の八路軍からも銃殺される。

九月二十日未明、手押しの荷車一台に五家族十九人分の最低限の荷物を積み、私たちは卡子へと向かった。これでいよいよ餓えから解放される。包圍網の外は解放区というらしい。解放区には餡ころ餅がたくさんあると父が言う。

「さあ、解放区じゃ、餡ころ餅じゃ」

長春を脱出すると決まった日から、父は体力のない私たちを上げますために、日に何度となくこの言葉を繰り返した。

カイホーク、その意味はよくわからないけれど、ともかくそこへ行けば餡ころ餅が食べられる。まるでピクニックにでも出かけるように心がはずむ。カイホーク、餡ころ餅、カイホーク、餡ころ餅……。心の中でそう唱えながらおぼつかない足を運んだ。餓死寸前の体だ。歩くということは大変な仕事である。

地理的に近いはずの卡子も、衰弱した私たちにはそう近くはなかった。卡子にようやく着いた頃には、陽は既に西に傾きかけていた。

卡子は鉄条網でつないだ木の柵で出来ており、その入口には国民党の歩哨が立って難民の出入りを管理している。いや、正確には「出入り」ではなく、出るだけの一方通行の門であった。ひとたびこの門をくぐって外へ出たら、二度と再び長春市内に戻ってはならないのだという。

国民党政府は最初のうちは市民、特に技術者が長春から出るのを何とか食い止めようとしていたが、このころには空からの援助を得るのが難しくなって国民党軍自身も餓え始めたためか、むしろ市民の長春脱出を勧めるようになっていた。しかし、「この門をくぐったが最後、二度と市